

43

“養育院” 成立における 第5代東京府知事・大久保一翁の役割

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター

“養育院”は明治5年に東京の救貧施設として出発し、その後、渋沢栄一の半世紀にわたる尽力もあり、日本の福祉・医療施設の発展に大きく寄与してきた組織である。しかし、渋沢自身は初めそれほど“養育院”へのこだわりはなかったと述べており、“養育院60年史”（昭和8年）の初めには大久保一翁（忠寛）の記事がある。一翁の人物像、足跡を辿る中で、養育院設立の動機と役割に気づいたので報告する。

一翁は、三河以来の旗本の家に生まれ、家斉、家慶、家定、家茂、慶喜、家達の6人の徳川家当主に仕えた。黒船来航時、老中・阿倍正弘に抜擢され、登用・左遷を繰り返しながら若年寄にまで栄進し、この間、海防掛、蕃書調所総裁、駿河奉行、京都町奉行、外国奉行、側御用取次、会計総裁などを歴任している。勝海舟を抜擢し、早い時期から幕閣の中で開国論、大小公会議、大政奉還論を展開しており、江戸無血開城の実質的最高責任者である。維新後は駿府にいたが、明治5年に東京に呼び出され、文部省二等出仕、次いで東京府知事に任命された。3年半の在職期間中に、幕府から引き継がれた町会所を営繕会議所に改組し、松平定信以来の膨大な七分積金の用途を営繕会議所に諮問。都市基盤の整備、救貧3策（養育院設立、工場や日雇い会社設立）などの答申を得た。“養育院”は応急的に加賀藩邸の空長屋を利用したが、永久施設として上野の護国院の一部を買い上げ、開所時には一翁自身が訪れている。関係者への手紙に、「人の万物に勝れたるは相親しみ相助くるの心ある故なれば、常にわが身に費やす衣食住の世の恵まんと心掛け、何業なりとも世のためとなるべき事を勤めておこたるまじく事。凡そ右の意に改め候方哉と存じ候、強て此文不泥解宜可為記候。集り候者へ手拭一つ遣度に付宜く渡方頼み候也」。この手紙を受けて、養育院掟書きの一項が付け加えられており、尋常ならぬ配慮である。

一翁が目付の時（1857）、幕府に提出した報告書の存在を安藤優一郎氏が指摘している。蕃書調所総裁、購武所開設の任にある時期、小石川養生所の衰退に直面し、欧米の書籍に「幼院・病院」の存在を知り、洋方医による大規模施設を構想し、七分積金様の仕組みを幕府に提案したのだ。その後、駿府奉行への転出により沙汰やみになったが、明治5年（1872）、東京府知事のとき設立した“養育院”は、目付時代に洋書（蕃書）を見て構想した、ヨーロッパ社会の福祉施設なのである。また、一翁が駿府の家老であったとき、帰国した幕府の第3回パリ万博使節団（徳川昭武・代表、渋沢・会計担当庶務）の報告を渋沢栄一から受けている。渋沢の会計報告の緻密さ、静岡での商法会所の立ち上げなどで二人の信頼関係は築かれた。この時の信頼感が、後に、営繕会議所の運営を渋沢に託し、渋沢が終生“養育院”にこだわり続けた要因となったように思われる。